

どなたでもいつの会でも参加できます

4月の「森三郎の作品を読む会」では、「役行者物語」(「赤い鳥」昭和7年3月号・4月号初出)を読みました。

「役行者物語」は昭和7年3月号・4月号の二号連載の作品で、「童話」と分類されている。しかし、会員の水野さんは、「一言でいうなら『神仙物語』とでもいべきものだ」と感想をまとめられた。

あらずし

役行者は名を小角(おづぬ)と言い、葛城山に住んでいた。行者には、行者に拾われ助けられた黄楊(ツゲ)と、韓国廣足という二人の弟子がいた。行者は、葛城山の金剛峯から大峯へ渡る道がけわしいので、まん中へ吊り橋をかけることにし、呪術をもってこの難事業にあたった。ところが葛城山の山神、一言主神がこのことを快く思わず、人へ乗り移って「役行者が天皇をほろぼそうとしている」と、時の天皇・文武天皇に讒言する。

そこで、羽引きの王と野あくたの等々力の二人を武将とし五百人の兵が、役行者を捕縛に向かう。途中、修行の厳しさに行者のところから逃げ出してきた韓国廣足に行者の居場所を詳しく聞き出す。(ここまで前編)

行者が験力を使うので、軍勢は、行者を捕らえることができず、役人たちは行者の実母刈藻とその妹の子葵を人質に取る。葵の婚約者鶴倉郎子から事情を聞いた行者は自ら出頭して捕らわれ、伊豆の大島に流される。(後編)

典拠

・「続日本紀」「日本霊異記」など。

一言主神が乗り移って天皇に託宣する人が女性であるのは、武蔵・多武峯神社所蔵の「役の行者絵巻」にその例が見られる。

感想1

・ 私たちは現在、様々な検索手段を使うことができるが、森三郎さんほどのような読書をし、どのような資料の集め方をしたのか、興味深い。

感想2

・ 役行者を主人公にするが、前編は弟子の「黄楊」と「韓国廣足」が生き方を探る葛藤、後編は「葵」と婚約者の「鶴倉郎子」二人の愛情と信頼とが、「赤い鳥」読者の子どもたちの関心と呼ぶところだろう。

前編の人物関係について、水野さんは聖書の物語とのこんな比較をされた。(下表)

感想3

・ 森三郎さんの作品を続けて読んでみると、表現の仕方に共通の特徴があることに気づく。前編の韓国廣足の人物像の中に「ふた親も亡くなって世の中があじきなくなり・・・」という表現がある。これは、昨年紙芝居にした「かささぎ物語」の真壁が、おじいさん・おばあさんを亡くした後の心理描写と同じ表現である。

行者	イエス
廣足	ユダ(裏切り)
黄楊	ペテロ(忠実な弟子)
羽引きの王 等々力	ローマ兵

これからも継続して読んでいくと面白い発見に出会えることと楽しみにしている。

次回予定 平成25年6月14日(金) 午後1時〜3時

「おばあさん」・「柏野大納言」

(どちらも、「赤い鳥」昭和7年5月号初出)

どちらも、森三郎童話選集「夜長物語」所収)

「森三郎に親しむ集い」いよいよ二日後に迫りました。

5月12日(日) 午後1時10分〜3時40分

刈谷市社会教育センター ホール(4F)

♪ 楽しい企画が揃いました。♪